

## 論文要旨と審査結果の報告

### 継続的なピア・フィードバック活動が学習者に与える影響 —ベトナムにおける「即興スピーチ」指導を事例として—

学位申請者氏名 : Nguyen Song Lan Anh (DOC10121)  
論文提出日 : 平成 26 年 11 月 14 日 (金)  
論文発表会開催日 : 平成 26 年 12 月 15 日 (月)  
審査委員会開催日 : 平成 26 年 12 月 15 日 (月)  
論文最終版提出日 : 平成 27 年 1 月 16 日

#### I. 論文要旨

本研究は、ベトナムの大学における日本語学習者に対し、「ピア・フィードバック（以下「PF」）」を取り入れた即興スピーチの授業を 10 回分実施し、学習者同士のやりとり、および自らのスピーチに対する学習者の自己フィードバック（以下「自己 FB」）のデータを分析することで、学習者の内省や他者評価のあり方がどのように深まるかを検討した研究である。

ベトナムの日本語会話教育は、教師が学習者の発話に対し一方的にフィードバックを行うという伝統的な形で進められていた。このため学習者には、自らの発話について自律的に内省を行うという習慣が根付かず、結果として、周囲の状況に合わせ、自分の言いたいことを適切に表現することが難しいという状態にある。

このような状況を改善するための手掛かりとして、本研究では、以下のような手法による即興スピーチ指導を行った。

- ① 学習者 3 人を 1 つのグループにし、うち 1 人がその場で与えられた課題に基づき即興でスピーチを行う。
- ② 聞き手の 2 名が、そのスピーチに対しコメントするとともに、話し手もそのコメントを受けて相互に話し合う。
- ③ 話し手は、話し合われた点を取り入れ、同じ課題で再度即興スピーチを行う。

3 名のグループの中で、スピーチを行う学生は毎回順繰りに変えることとし、計 10 回の授業を実施した。このような 1 コースの授業に対し、以下 3 つの研究を実施した（なお本研究では、2 グループ 6 名の学習者を分析の対象とした）。

#### 研究 1 :

コースに参加した学習者全員が、コース全体の開始前と終了後に即興スピーチを行い、

それらのスピーチに対し専門の日本語教師が、あらかじめ指定された評価基準に沿って評価を行った。いずれの学習者についても事後のスピーチの方が高い評価を得ており、特に「内容」「構成」「聞き手への配慮」という評価観点について伸びが大きいことが分かった。

#### 研究2：

計10回のPFのやり取りをすべての録音・文字化し、回を追うごとにPFのやり取りにどのような変化が見られるかを質的・量的に分析した。その結果として、A) 他者のアドバイスや意見の「単純な受け入れ」から「具体的な説明を伴った受け入れや反論」へ、B) 単なる問題点の指摘から改善案の提示へ、C) メタ的な視点の出現、D) 聞き手の立場に立ったフィードバックの出現、などの変化が見られた。

#### 研究3：

コースに参加した学習者全員が、コース全体の開始前と終了後に即興スピーチを行い、そのスピーチに対する自己FBを行った。事前・事後の自己FBを録音・文字化して比較したところ、事後では、ア) 改善案の提示、イ) メタ的な視点、ウ) 聞き手の立場に立った評価、エ) 特定の箇所を指定しての評価、オ) 学習意欲の表明、などが、新たに出現するか増加していた。また、PFのやりとりも自己FBも、「分析の深まり」、「評価観点の多様化」、「コメントの具体化」など、同一の方向性をもつ変化を行っていることが確認され、両者に何らかの関連性があることが示唆された。

以上の結果から、即興スピーチ指導にPFという手法を取り入れることにより、スピーチのプロダクトが改善されるだけでなく、学習者自身の内省能力・分析能力を高める可能性を持ち得ることが示された。

## II. 審査結果報告

本論文の最終報告に引き続き、平成26年12月15日(月)15時半から審査委員会が開催された。審査委員は宇佐美洋(主査・国立国語研究所)、木谷直之(副査・国際交流基金日本語国際センター)、久保田美子(副査・国際交流基金日本語国際センター)、岩田夏穂、近藤彩(麗澤大学)、大山達雄教授の6名であった。

本論文については、以下のような意見が出された。

※6名の学習者の10回にわたるやりとりを丹念に分析し、ピア・フィードバックという手法の有効性を示した労作である。近年、協働学習に関する研究は増えてきているが、多くの研究が書きことば研究に関するものであり、スピーチのような話しことば

教育に協働学習を取り入れた研究の事例はまだ少ない。また、1 回限りの PF だけを分析対象とするのではなく、継続的なコースにおけるやり取りの変化を追っていった点、コース全体の前と後を比較し、コース全体としての教育効果を探っている点などは、本研究の独自性、先進性を示すものである。

※一方で、本研究の論点をより明確に示すため、いくつかの修正点が指摘された。最も大きな点は、量的分析と質的分析の関係性の問題である。量的分析で思わしい結果が出なかったため質的分析を行った、という書き方になっているが、量的分析と質的分析を併用するなら、「異なる分析方法を用いても同じような結果が出る」ということが示せなければならない。現在のままだと、量的分析でのコーディングそのものに対する信頼性が疑われかねない。

※主として質的分析の結果に基づき論を組み立てているが、引用されている発話例が全体の中でどのような位置づけにあるのかが示されていない。都合のいいデータだけを引用しているという疑いをもたれないよう、「量的分析で言えること」を明確に示すことは不可欠である。

※本研究では、「即興スピーチ」の授業を改善することが目的なのか、あるいは「協働学習」のひとつの場として「即興スピーチ」を取り上げるのかが不明確である。論文は前者の書き方になっていたが、発表会では後者の説明がなされていた。いずれかの方針を明確に打ち出すべきである。

※題目はこれで適切なのか。「自己フィードバックの変化に着目して」とあるが、他者へのコメントの変化も見ているのでないか。直前のコメントとも関連するが、本研究の位置付けや意義がより明確になるような題目が望まれる。

※その他、参考文献をはじめ、単純な誤りが散見される。これらは慎重に修正されるべきである。

本審査委員会では、全委員が合格と判定した。但し、上記の指摘事項についてはそれぞれ論文に反映させるよう指導があった。これらの点については論文提出期限までに、再検討等を行い、主査に相談の上論文に反映し、完成させた。

以上。